

大学教育改革と大学生協の役割

- 饗宴（シンポジオン）の復活への貢献 -

庄司 興吉*1

Email: kokshoji@nifty.com

*1: 東京大学名誉教授（社会学）

◎Key Words 大学教育改革, 饗宴（シンポジオン）, 大学生協

1. 民主化の流れと主権者の事業

21世紀も14年目に入り、生活向上と自主性を求める人びとの大きな流れが、世界でも日本でも強まってきている。歴史の趨勢は民主化であり、民主社会の担い手は私たち主権者である。

私たち主権者は、主権者の意思を、できるだけ正當に反映する選挙をつうじて議会をつくり、それをつうじて、あるいはそれと並行して立てる政府によって、私たちの社会を、望ましい方向に望ましいやり方で運営していかなければならない。民主主義の意味を私たちがどれだけ正しく理解しているかが、今、問われている。

しかし、それだけではない。民主社会の担い手が私たち主権者だとすれば、私たちは民主的な政府をつくるのと並行して、私たち自身の手で事業をおこない、社会に必要な物資やサービスや情報を調達していかなくてはならない。ところが実際には、ずっと前に、あるいは最近、資金力のある人たちが始めたさまざまな企業があり、私たちは必要なほとんどのものの供給をそれらに依存してきており、今でもしている。

これで良いのだろうか。19世紀半ばのイギリスで、利益追求本位の企業に苦しめられた労働者たちが、少しずつ出資しあって自分たちで非営利の事業を始めた。そして、協同組合と呼ばれるこの事業形態が、その後世界に広がり、1895年には国際協同組合同盟（ICA）ができて、2011年からの10年間は世界的に「協同組合の10年」として、いろいろな分野の協同組合の、協同組合らしさ（アイデンティティ）を強めて、強く大きくしていく運動が展開されている。

2. 大学生協の歴史的意味

日本では、第二次世界大戦敗戦後の大学で、学生たちに食事、本、文房具などを供給するため、学生たち自身が協同組合をつくり、それがしだいに広がって連合会ができ、さらに日本経済の成長後は事業連合をつくって互いに助け合いながら、単位数や組合員総数からいえば世界にも類を見ない生協が発展してきた。学生たちは、入学してしばらくして選挙権を手にし、主権者として民主社会の政府づくりに加わるようになるが、大学生協のあるところでは、入学と同時に組合員となり、主権者としての事業に加わっている。

組合員が大学における生活協同組合の意味を理解すれば、自分たちの大学を良くしていけるばかりでなく、

協同の立場から日本と世界の社会を見直し改革していくこともできる。大学生協はこれからも、その深い意味を、学生、院生、留学生、教職員、生協職員、一般の人びとにも理解してもらいながら、ますますの発展を図っていかなければならない。

3. 大学教育の改革方向

他方、こんにち大学は、権威主義的な知識創造・伝達機関（アカデメイア）から、学生と教員が胸襟を開いて語り合い、自由な討議のなかからたがいに知を習得し合っていく饗宴（シンポジオン）の場へと、変容するよう求められている。大学で教えられる知識（knowledge）の大部分はネット上に公開され、誰からもアプローチできるものになってきている。しかし、それをなぜ知る必要があるのか、どんな役に立つのか、さらにどう発展させていくのかを理解し、身体にしみこませて知（savoir）にする作業は、以前にも増して、学生と教員との直接対話がいにはなくなってきている。

アカデメイアとシンポジオンという古代ギリシャで作られたモデルが、今あらためて大きな意味をもってきているのである。そしてそれは今、権威主義にたいする民主主義の擁護という、21世紀最大の課題とも結びついてきているのである。

4. 大学教育改革と大学生協

大学を学生同士が、学生と教員とが、出会い、語り合い、シンポジオンの場にしていく重要な組織の一つは、学生と教職員との生活協同組合である。大学を本当の教育の場にしていくために、大学生協に今何ができるのか、大学生協は何をしなくてはならないのか。私たちは、大学生協について、議論しなくてはならない時期に来ている。

私は、各地の生協を訪問して、学生、教員、生協職員に会う機会があり、たいへん勉強になっている。生協の学生委員は、多くのところで元気で、創意を凝らした活動をしている。しかし、彼らが大学生協の意義についてどのくらい議論しているかを聞くと、答えは必ずしも望ましいものではない。そういう議論をするよう、仕向けられていないように思う。理屈よりも行動だ、といわれているかもしれないが、国際協同組合同盟（ICA）がアイデンティティの強化を呼びかけて言っているように、それではすまない時期に来ているのである。

生協の強みの一つは、食堂を初めとして場所を持っていることだ。この場所は混んでいるときには大変だが、けっこう空いているときもある。そこで、学生委員が中心になって学生が集まり、生協の意義について雑談会でも読書会でも良いから話し合いをはじめ。集まってきた学生も学生委員自身も、大学生協の意義が分かってきて、以前よりも大学生協を利用し、大学生協のために活動するようになる。そういう渦を少しずつでもつくりだしていけないであろうか。

読書会のテキストとして、さしあたり、滝川好夫『大学生協のアイデンティティと役割』（日本経済評論社）、庄司興吉『大学改革と大学生協』（丸善）、庄司興吉・名和又介編『協同組合論』（連合出版）などがある。しかし、いずれもむずかしすぎたりしてびったりではないので、私は今、もっとびったりのものを書こうと努力している。

5. 教員の役割

こう考えてくると分かるのだが、学生の読書会、討論会などに教員が加わってきて、助言したり、リードしたりできるようになれば、議論は格段に密度が高くなることが予想される。その時は、テキストはその先生の本でもなんでも良いから、とにかく大学教育と大学生協が絡む議論になれば良い。大学教育は今、激変期にあるから、先生も今どういう授業がいちばん良いのか、迷っている。だから、学生に率直にどういう授業をしてほしいかを聞き、それに生協がどう貢献できるのかを議論するのも良い。教員と学生が一緒になり、生協の力を使って教材などを独自につくりだしていくのが望ましい。

私の見るところでは、教員自身も、大学生協の潜在的な可能性に気づいていないことが多い。ある時期までは、労働組合のことばかりが語られ、協同組合については今でも理論が不十分だからである。私はこの点もすごく気になっているので、一刻も早くそういう本を書かなければならないと思っている。当面は、大学生協のブロック運営委員長や理事長の先生などをつうじて、指導的な先生方にポイントを理解してもらい、先生方に広げていくことはできないものだろうか。

6. シンポジオンの目標

学生同士や学生と教員とのあいだの議論の目的は、最初はまったくなんでも良いのだが、大きな流れとしては、大きな歴史の流れのなかで、私たちがどこに向かっており、何をしているのかが分かるような方向に向けられるべきであろう。

私は、社会の大きな発展のなかで、大きな企業で働いている労働者が団結して社会を良くする時代から、社会の主権者である私たち自身が、民主的な政府をつくるだけでなく自分たちで民主的な事業をして、民主協同社会をつくりだしていく時代への移行を訴えてきた。ドイツの社会学者フェルディナンド・テンニースの言葉を借りていえば、共同社会（ゲマインシャフト）から利益社会（ゲゼルシャフト）への移行を、主権者たちの手で協同社会（ゲノッセンシャフト）への移行に展開していく動きの重要性である。そして協同組合

（ドイツ語ではそのままゲノッセンシャフト）こそ、協同社会の単位なのである。

私は、これまでの国際交流と世界各地の視察とをつうじて、日本の大学生協が、日本における協同組合の先駆者の一つで、連合会をつくり、これだけの規模で大学生活を支えている例は世界にも例がない、ということを発見し、そのことをいろいろな場でくり返し力説してきた。学生たちが大学入るとともに生協に入り、協同を体験しつつ議論して社会に出ていけば、それが民主協同社会への道につながる。今ある生協の場から、まず集まれる人びとでこのような議論を起し、しだいに広げて大きな渦にしていけることが、かぎりなく重要である。

注記

この論文は、これまで著者が大学生協関連のいろいろな場で書いたり、発表してきたことをもとにしている。